

ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第101号 (2014年10月)

風に吹かれて (79)

白井啓治

『金木犀の香ながれて 赤とんぼ』

100号記念祭が無事終わり、ほっと息つく間もなく101号の編集がやって来た。100号祭の次は10年祭かと先を思っているが、毎月の時の流れの何んと速いことかと改めて思っている。

100号祭のメインとなる市川紀行兄による文化力についての講演には大勢の方にお越しいただき想定席数を大きく超え、嬉しい大慌てをしたが、普段気付かぬところで大勢の方々からご支援を頂いていることに感謝申し上げる次第である。

この会報を立ち上げるときから、この地の文化力への刺激を与えることが出来たらと願って来たのであるが、市川兄の講演への大勢の参加者を頂いた事で、小さい一歩ではあるが前へ進んだかなと、当会報の10年への先の希望を持てたことは嬉しく、有難いことである。

「文化力」とは昔から使われていた言葉ではある。しかし、一般にはなかなか認知度が高まらなかったのであるが、最近では新聞、雑誌等でも多用されるようになり、ようやくその力の存在が認知されるようになってきた。

とはいえ、文化力の実態そのものは余りにも漠

然としていて、何となく使うといった感の否めな言葉でもある。そこで、改めて小生なりの文化力についてすこし述べてみたい。

文化力とは、の問いに対する回答には色々な側面からのアプローチでの解答が用意できると思う。しかし、その根源をみると「異質を受け入れる、認める力である」と言える。文化力と纏められる諸々の力の中で最も基本的といえる力とは創造力や起創力であろう。そして、その創造力・起創力は異なるものを認め、受け入れることによって生まれてくる力であると言える。創造性や起創性というものは、異なるものを排斥する態度では、発揮されない。創造性や起創性というのは現状の既成を突き破る、所謂型破りを発想することなのである。

既成化された考えの中では、新しいものを創造することは難しい。また、既成を守ろうとする力の中にいると、既成はどんどん時代に遅れ陳腐化してしまい、外界の刺激に耐える力が失われ、ついに滅びてしまう。

生物界に何故雌雄が存在するのか。それは己の種を残すためには自分と違う遺伝子を取り込まないと刺激の蔓延するこの世に生き残ることが出来ないからである。クローンには外界の無限の刺激に対応する力が備わっていないのである。生体的

にも思考的にも。

新しい事への発想は仮説の設定である。仮説は、異なるものを積極的に受け入れることによって生まれる突飛な飛躍ということができる。

進化論の中に進化の極大化した生物は滅びるという話を聞いたことがある。この進化の極大化とは現状に閉じこもって他の異質なるものを拒否する状態をいうのではないかと小生は思うのであるが、果たしてどうなのであるか。

安倍政権下でまたまた地方の活性化を大義に予算のばらまきを思考している様であるが、地方の

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月号で創刊100号を迎えました。ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

活性化を阻んでいるのは、異なるものへの受容力の欠如なので、そこに予算を付けたら地方は益々衰退してしまう。天下国家を論ずる顔をして、自政権の安定化を考える政策では、進化の極大化した生物同じと言える。安易な予算計上などを考えると、異なるものを拒否し、一部の者の利食いになり終わり地方は益々弱体化してゴーストタウン化する。

何か一つの提案、提言があると即井の隅をつつくような反論を見るが、これはまぎれもなく文化力の欠如だと断じてもいいのではないだろうか。

戦い済んで日が暮れて

打田昇三

「ふるさと『風』」百号記念行事について、皆様のご支援ご協力を頂き何とか盛会裡に行事を終わることが出来た。記念講演を強引にお願いした市川紀行先生をはじめ著名な先生方に貴重な原稿を賜り、多くの方々にご来場を頂き、思いがけない方から経済的な御援助を忝くして感激している。特に会員ではあるが木村 進さんには記念号印刷から行事会場まで、俗に言う「おんぶにだっこ」でお世話になり誠に申し訳なく存じている。

主宰の白井さんには健康が勝れない中で行事の大黒柱に兼ねて朗読のアトラクションを公演して貰ったので行事終了後に体調を崩されたとか、もし病状が長引くようなことであれば、会員一同は夜逃げをしなければならなかった。

何はともあれ百号が出た後の百一号は発行期日が未だ先だ！と油断をしていたのだが、白井さん

に原稿の催促を受けて慌てた。「風」は間断なく流れていることを忘れていたのである。白井さんの頭の中には既に次の十周年記念の構想が有るらしいから油断は出来ない。取り敢えず、お粗末な原稿で急場凌ぎをすることにした。

平成八年五月五日の夜にNHKはスペシャル番組で「トロイの秘宝を追え」を放映した。これはモスクワ市のプーシキン美術館で開催されていた「トロイ秘宝展」を取材した番組であり其の目玉は一八七三年にドイツの考古学者ハインリッヒシュユーリマンがトルコ西端のダーダネルス海峡を望むトロイの遺跡で発掘した「プリアモスの財宝」である。シュユーリマンは一八二二年、北ドイツの生まれであるが、なぜか少年時代からホメロスの叙事詩を愛読し、その内容を信じていて古代都市国家トロイは実在した、という信念で発掘を始めたと言われる。莫大な資金が必要であるが、彼は先ず商人として成功してから資産を注ぎ込んで自費で偉業を達成したという。

当時のトロイ遺跡はギリシアの占領下に置かれており、見つけた財宝はギリシア政府に没収されるのだが、シュユーリマンはどういう手段を使ったのか監視の目を逃れて是をドイツに持ち帰りベルリン博物館の目玉展示品になっていた。

ドイツは日本と同じように第二次大戦の敗戦国となりベルリンも主にソ連に占領された。シュユーリマンがトルコ(ギリシャ)から黙って頂いてきてベルリンに在ったと思われる「プリアモスの財宝」はドイツの敗戦と同時に行方不明になった。

私は一九九六年(平成八年)にロシアの観光に行った。当時の大統領は酒が好きな何とか言うおじさんで今の様に余りウルサイ事は言わなかったか

ら、赤の広場から大統領執務室の窓際までクレムリンに入り込んで自由に観光が出来た。

帰国する前に時間が有って現地のガイドが希望の場所に案内する、と言ったのだが私は疲れていたもので「何処でも良いから、近い所へ！」と希望を出した。その結果、一番に近い場所に在った「プーシキン美術館」に連れて行かれた。其処で見たのが何と「プリアモスの財宝」であり、旧ソ連が何十年も隠していたのである。それから半年ほどして日本でプーシキン美術館展が開かれ、印象派絵画などが展示されたが「プリアモスの財宝」は来なかったと思う。手に取るように見られた私は幸運だと思っている。今回の「ふるさと『風』」百号展の成功も皆様のご協力など多くの幸運に救われたのである。有難うございました。

先進国の奢り(3)

菅原茂美

先進国の最大の罪は、史上、何度も繰り返されてきた「侵略」行為だ。

人間どんなに偉そうな事を言っても、所詮野生の動物が少し変化しただけのもの。大型類人猿で、最も早く我々の祖先から枝分かれしたオランウータンと、その次に枝分かれしたゴリラは、かなり温厚な動物である。勿論殺し合いなどしない。ところが最後に残ったDNAがわずか1%ほどしか違わないチンパンジーと人類は、相当残酷な動物で、縄張りを侵略し合い、殺し合いまで行う、かなり凶暴な動物である。

全ての生物の「生きざまの基本」は、強弱の差

はあれ「縄張り争い」の根性に貫かれている。人類の歴史は列強が先進武器を駆使して未開地等を侵略し、縄張りを拡張した戦いの歴史とも言える。

野生動物は生存のため、「テリトリー」の維持・拡大に命をかけて戦う。それが生き物の根本的な姿。生命の基本原理は、己の命を維持し、己のコピーを増やし、「種」を継続すること。どんな生物を見ても、全ては、この原理に貫かれている。

しかし野生動物を見ると、縄張り争いなどの勝者は、敗者が恭順の意を示せば、決して敗者を殺害まではしない。ところが、脳味噌を膨らました人類は、敗者を惨殺するだけでは治まらず、非戦闘員の女子供まで根こそぎ殺害した例がしばしば見られた。人類とは真に残酷な動物である。

哺乳動物の中でも、最もこの世に新しく出現した霊長類。その中でも最後に生まれたわずか700万年の歴史しか持たない人類。一番末席に座るべき人類。それがこの地球上を席卷し、侵略し合っている。環境を汚染し、大きな顔で威張り散らしている。

また「聖」なる宗教の根本理念といえども、所詮は、己の宗派の勢力拡大に全力を尽くす。どんな立派な経典・教義を掲げようが、一人の教祖を祀り上げ、超越的絶対者として卑俗なものから分離し、排他的立場をとる。

宗教は、自然崇拜の原始的なものから、かなり過激な特定の民族宗教。そして世界的な仏教・キリスト教・イスラム教など多種多様である。いずれも表向きは、人心を迷いから救い、平和と安定を目指すのだが、どういう訳か、他者を受け入れない。中には強烈な原理主義に貫かれ、己の教義を絶対視し他者を鋭く排斥する。狭量この上も

ない。結果は宗教戦争へと発展する。

先進国が発展途上国或いは未開の地を支配し、先住民の信ずる「神」を邪悪なものとし、徹底的に排斥し、強制的に己の宗教に入信させた歴史は世界にゴマンとある。

私はマヤ文明の遺跡を訪ね、しみじみ感じたことは、博愛主義を掲げるキリスト教徒が、なぜにマヤの遺跡をあれほどに破壊し、先住民を殺害し財宝を奪い取ったか。教義の理念は、一体どこへ行ったのか？

マヤ文明はコロンブス以前に衰退したが、インカ文明は、西洋列強により、徹底的に破壊された。例えば世界に誇る大英博物館とやらは、私に言わせれば「盗品陳列館」とも言える。マヤの遺跡には、歴代の大王の石像が並んでいるが、ところどころ歯が抜けたように、空っぽの席がある。そこには第〇〇代大王の彫像は、大英博物館に：などと書かれている。石造が風化崩壊するのを大事に保存するため：との弁解もあるが、歴史的建造物は、そこにあつてこそその歴史遺産である。真から保護したいのなら、その上に屋根でもかけ、厳かに保存したらよい。インカの遺跡も同じこと。エジプトのピラミッドも盗掘が酷かったようだが、たまたま難を逃れた第18王朝のツタンカーメン王のミイラや副葬品は、奇跡的に盗掘を免れた。

*

さて現在、中国はなぜにあれほど強く半日思想を貫くか？ なぜ急に豹変したか？ あれだけ日本はODA援助をし、国民が豊かになり世代が代われば、対日感情も好転するはず：と読んでいたのに、結果は、あまりにも楽観的幻想に過ぎなかった。

私は豹変の深層を知りたくて、色々の資料を読み漁った。要約すれば、仏皇帝ナポレオンは「中国は眠れる獅子だ。目を覚ませば、世界を震え上がらせる事になる」と予言した。今正に眠れる獅子が目を覚ました感じ。習近平は、「侵略の歴史を否定・歪曲・美化しようとする者は決して許さない」と宣言している。歴代の、どの指導者よりも対日姿勢が厳しい。

1905年孫文は「振興中華」を提唱。毛沢東は49年「富国強兵」を急ぎ、中央集権化を強力に推し進めた。その副首相を務めたのが、習近平の父「習仲勲」である。金平は父親の「国共内戦」や「対日抗戦」の実践を肌で感じて育った。それだけに、一党独裁・富国強兵に執念を燃やす。

毛沢東は、過剰な平等主義を貫いたために経済政策は失敗したが、鄧小平は外資導入による開放政策に棍を切り、隠忍自重の路線をとり、97年頃より経済成長が軌道に乗ってきた。そして今日、世界第2位の経済大国へと進展した。習近平は、GDP（国内総生産）と一人当たり所得を10年に比べ、20年には倍増し、米国と肩を並べる大国を目標に掲げている。しかし最近のニュースによれば、サイバー攻撃でアメリカの戦闘機の設計図まで、中国に盗まれているという事だが、盗まれる方のセキュリティの甘さもさることながら、盗む方の高等技術にも、ただただ呆れかえる。鼠小僧もルパン三世も、面子丸潰れ？

*

さて日中関係は、あまりにも歴史にこだわり過ぎると、正常な友好関係に水をさす。しかし、真実の歴史は、歴史として両者は認めなければ、友好関係は一步も前に進まない。例えば、南京大虐

殺事件だが、その数は、中国は東京裁判で43万人を殺害されたと訴えた。しかしその後、公式見解では30万人と言っている。習総書記は世界中でそう言い廻っている。しかし虐殺の定義、当時の状況判断で、見解は異なり、日本では4万人から10数万人と言っている。こういう話は、当然、加害者と被害者で見解は異なるであろう。

東京裁判で、虐殺の指揮を執った「松井石根」は死刑となった。そして、1972年、田中角栄首相と周恩来首相との日中共同声明で、戦争状態終結・国交回復を表明し、中国は賠償請求を放棄した。

中国側にとって清国は1842年、英国とのアヘン戦争に敗れ、南京条約で「香港」を割譲する屈辱を喫した。更に1887年、マカオをポルトガルに割譲。そして95年(明治28年)、日清戦争で、台湾を日本に奪われ、更に小国日本に、属国であった朝鮮の独立を認めさせられ、賠償を支払わされ、あげくのはてに1910年、朝鮮は日本に併合された。

さらに1932年、日本は清朝廢帝の愛新覺羅溥儀を執政として、傀儡(かいらい)政権「満州国」を成立させ、関東軍が駐屯した。更に、中国侵略政策が拡大し、1937年〜45年の日中戦争は、全面戦争となり、41年(昭和16年)の太平洋戦争開戦は、その一部である。このように先進国は武力を持って、発展途上国を意のままに虐げてきた事は事実である。

今中国は、尖閣諸島、南沙諸島など領土問題は、成長した経済力・軍事力にものを言わせ、一步も引下らない。さんざん痛めつけられた過去を思えば、その気持ちも、分からないでもない。かつて

侵略された者の心中を、多少は察してやる広量が必要であろう。

今中国は、サイバー攻撃や特許権侵害など、世界に反乱を起こしているから国際批判を浴びているが、もつと正当な手法で、自己主張したらよいと思う。日本も冷静に客観的に、相互理解した上で、新たな友好関係の構築に全力を尽くすべきである。短慮から武力衝突などに突っ走るのには、真の平和愛好国家が取るべき道ではない。

さて、侵略の歴史を、南北米大陸に目を向ければ、これまた筆舌に尽くし難い残酷なものであった。両大陸には先住民であるインディアン・インディオが9000万人いたが、なんとコロンブス以降の西欧列強は、その9割を殺害し土地や財産を奪った。

更に新大陸に白人が定着するため、アフリカから奴隷として黒人を拉致し、市場で売買し、強制労働をさせた。そして奴隷解放を実現したリンカーンは1865年、奴隷解放に反対する者により暗殺された。

更にオーストラリア・ニュージーランド・アフリカ大陸にも、ヨーロッパ列強は侵入し、先住民を虐げた。その他侵略・虐殺に関する歴史は世界中に無数にある。アフリカのルワンダ。ヨーロッパのユーゴスラビア。数えきれないほどの人類の残酷な歴史。現在は、イスラエルと中東との紛争。イラクにおける宗派対立。ウクライナを廻るEUとロシアとの駆け引き。呆れるほど紛争は絶えない。人類の本性の醜さに、しみじみ失望させられる。

一方、日本国内でも大和朝廷とやらが、東北の蝦夷を虐殺した醜い歴史が存在する。

そのあと平安後期、前九年の役・後三年の役などで、東北を平定した侵略戦争。

歴史を遡れば、平穩に暮らしていた先住民である縄文人(ほぼ10万人)を、大陸の戦争難民である弥生人が大挙(100万人)して押し寄せてきて、日本列島を占拠。現在の日本人の多くが、大陸からの流れ者(DNA検査で、バイカル湖周辺にその源流を持つ)の血を引く。そして、弥生人は先住民アイヌ民族を徹底的に虐待した。以降、戦国時代には隣国同士で、どれだけ多くの戦争が行われたか数えきれない。

先進諸国の「暖衣飽食」も奢りの極み。世界の資源をかき集め、先進国は「贅」をむさぼる。

先進国で日常暖衣飽食に慣れている人には、気がつかないかもしれないが、先進国が、そんな贅沢をしなかつたら、発展途上国は、もつと資源を失わずに済む。

先進国の一人の食糧は、恐らく途上国の10人分に相当するであろう。肉を生産するためには、畜舎・土地・労働力・税金・薬品・電力や機械そして勿論、穀物を要する。穀物は輸送費の他に労働力・電力・農機具、更には真水・肥料・農薬・包装袋代など数え上げたらきりが無いほど費用がかかる。それゆえ一人を養う分の肉は、10人分の食糧に相当するであろう。

私は中米熱帯の農民の姿をかなり見てきた。コーヒー畑にパイナップル・バナナ、それにオレンジ・グレープフルーツ・パイア・マンゴウなど農民は真黒になつて働いても、利益は殆どアメリカ

力資本に持つていかれる。このジレンマに無性に腹が立つ。働く者が報われないこの不平等。いくらか文明が進化してもさっぱり治らない。発展途上国といえども憲法で人権は保障されているが、形ばかり。それは先進国も同じだが、なぜか貧富の差は必ず存在する。大変立派な「国連」とやらが存在するが、地球規模で、世界の隅々まで真の自由・平等が行き届くよう、何はさておき真つ先に果たすべき喫緊の課題だ。

更に高級な衣服は、野生動物を絶滅危惧種に追いやり、絹糸は多額の生産費を要する。高級なカシミヤ織物を産するカシミヤ地方は、今でもその領有権を巡りインドとパキスタンが核弾頭まで持つて争っている。

化学繊維は、環境を破壊する汚染物質を大量に生み出す。華麗な衣装の裏には、それを生み出すまでの諸々のゴミが出る。

先進国の近代化の後ろには、途上国の多くの犠牲が伴う。例えば発展途上国の森林が、先進国の建築資材やパルプとして、無制限に伐採されている。過度の伐採は異常気象を引き起こす。国際規制など何のその。又、ヤシ油をとるため、熱帯の自然林が姿を消す。更には、アルコール燃料を生産するため、ブラジルの林野が消滅していく。

又南米ペルーの古代山岳遺跡マチュピチュやナスカの地上絵遺跡など、観光資源は、世界から押し寄せる観光客で踏みにじられている。アマゾンやニューギニアの石器時代に近い生活をしている裸族など、物珍しく、先進国の取材班により、無理に着物を着せられて撮影され、文明の道具なども与えられて、生活が急変しつつあるという。

又西欧の教育は、イスラムの女子児童には不要

として、女子児童の集団拉致が行われた。いずれも先進国の生活習慣を無理やり途上国へ押しつけた現象だ。先進国は、己の文化を無理やり途上国へ押しつける悪習は、厳に慎むべきである。

それにしても私は発展途上国に滞在して真に不合理に感じたのは、先進国が途上国同士にケンカをさせ、古くなった武器を無理やり買わせている現実である。国営発電所が予算不足でしょっちゅう停電しているというのに、空には戦闘機がブンブン飛んでいる。真実かどうか知らないが、先進国は途上国に対し、色々うわさを流し、隣国同士を仲たがいに導き、古くなった兵器を双方に無理に買わせるのだという。武器産業の繁栄で食っている大国もあるのだから、真の世界平和はほど遠い話だ。

人類とは高等生物ではない。自由と平和に対し、過去多少の努力をした事実は認める。しかしこの世にも強欲な、ならず者がいて、そんなものは、簡単に吹き飛ばされてきた。それがこの世の中である。

驕りか我欲か

木村 進

ふるさと風の会の百号記念展が終わった。多くの方にお越し頂き大変うれしく、またこれからも頑張っていきたいと意を新たにしております。

今回の会報記事を書こうとしたときに御嶽山が爆発しました。噴煙は一気に空高く吹き上がり、山は紅葉シーズンを迎えて多くの登山者が山頂付近で落石や粉塵などによる大きな人身災害となり

ました。噴火が昼間であったことが被害を更に大きくしてしました。たとえ水蒸気爆発とはいえ、地震予知と同じく火山の予知が全くできていなかったことになる。しかし今回の爆発を予測するのは難しくやむを得なかったとも言おうような専門家の解説が多くなされている。

自然を前にしていっ頃から人類はこれをコントロールできると思いあがるようになってしまったのだらうか。

三年半前に起きた3・11の東日本大震災が起った際に東京都知事であった石原新太郎は「我欲を一度洗い流したほうがよい」と発言して一部のマスコミ関係者や被災者たちから非難を浴びた。

また大地震などを天罰といったことを非難する人が大勢いた。本当に非難することなのだろうか？

昔から日本人は自然のなす業を恐れると同時にこれを大きな神の力として崇めてきた(畏敬の念を抱いてきた)。私たちの生きていたった100年程度の期間など地球の活動のほんの一瞬にすぎないのだ。そのことを心の中にしっかりと理解していないと自然の成す業に振り回されるだけで自然をコントロールなどという言葉は畏れ多くて使えないはずだ。

報道では川内原発が年内にも再稼働が行われるかもしれないという状況にある。安全というには程遠い基準に合致したということだけれども責任をとらない体質にまつたくの反省もない。今までより少しはいろいろなことを考えて基準を厳しくしたというに過ぎない。

今回は三年半前に起きた3・11の後に気になつてブログに書いてきたものをまとめて紹介しておきたい。

○貞観地震に学ぶ(2011年5月7日)

今回の東日本大地震について「貞観(じょうがん)地震、津波」との比較がいろいろと行われています。先日、まだ津波や地震の爪痕が多く残る仙台に行きました。そして海寄りの若林地区も海岸に近い場所は目を覆いたくなる悲惨な状況が目前に広がってありました。そしてこの近くに陸奥国の「国分寺と国分尼寺」跡が残されていることを知り石岡と比べながら興味を持って調べていて今から1100年以上前の貞観地震の記事を見つめました。

貞観地震については、この時代の事を書いた歴史書「日本三代実録」に記録が残されており、大地震と津波が記録されています。貞観11年(869年)に発生し、M8.4以上であり、今回(M9.0)を上回る規模の地震と津波であったかもしれないと言われています。

「日本三代実録」の記述では海から数十百里の先まで水浸しとなり、千人程が溺死し、野も原も道も大海原となり、城下近くまで海水が来たとなっています。この城は仙台と塩釜の間の多賀城市にある多賀城のことだと推察されます。聖武天皇の勅命(741年)で建設された国分寺と国分尼寺はこの陸奥国が最北でした。そして、この仙台市の若林地区にこの二つの寺の遺構が残されていました。

その場所は海拔16m程の所にあり、今回の津波はこの少し手前まできておりますが、ここには到達していませんでした。しかし、貞観地震による津波ではこの寺にも津波の被害があった記録が残されています。仙台の海寄りの地形を調べてみる

と3000年ほどの間に貞観津波の前2回を含め、3回の大津波が襲っていることが判明しています。今回が4回目となり、周期も800年〜1100年間隔とわかっていたのです。貞観地震から今回の大地震まで約1100年強です。今回の地震に警鐘を鳴らす研究者がいましたが、これも千年単位の話をもとに考えることがされてこなかったようです。

もちろん、その間にも明治三陸津波・昭和三陸津波がありますが、どうも今回の地震発生の範囲とメカニズムがこの貞観地震にとっても似ていると言われています。

もつとも貞観地震の5年前には富士山が大爆発して青木ヶ原ができた時代ですから、今とは少し違うかもしれませんが、火山活動もこれから活発になるかもしれません。貞観地震の後で、阿蘇山・鳥海山・開聞岳などが噴火しています。注意深く見て行きたいと思えます。

この貞観地震の時代に起こった天災・天変地異で特に気になる事柄として貞観地震の18年後(仁和3年(887年))に起きた五畿七道地震とも呼ばれる「仁和地震」があることです。これは東海・南海地震でM9.0クラスの巨大地震だったかもしれないという大地震と津波です。東海地方、紀伊半島、関東南部など標高20m以下の所に住んでいる方は、巨大地震があった場合は高台、または5階建て以上のビルにすぐに避難をしなければなりません。自分のいる海拔を知ることと共に、訓練しておくことも必要ですね。Tsunamiという水面を上昇させて地図を見られるソフトもあり便利だ。今回の被害を見てみると、危機感が足りなかったと思われるところがありました。今回の地震前に、貞観地震の再来を真剣に心配されていた研究者が

おりました。地震は何時かがわからないので日頃からイメージを頭の中に描いておくことも必要でしょう。

○古東海道と富士山噴火(2012年1月10日)

昔の江戸時代の東海道は「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」などと言われており、箱根越えるは東海道の中の難所の一つでしょう。

この箱根路は塔ノ宮の下を通る道ですが、江戸時代の東海道は箱根湯本からもう少し南側の現在の箱根新道に沿った旧道でした。箱根の関所近くには、お玉が処刑されたという「お玉ヶ池」などがあります。(箱根湯本〜箱根峠間:3.2km、標高差最大:211m)一般には江戸時代の東海道を旧東海道と言っており、この東海道五十三次の道しか思いつきません。

しかし今の1号国道(東海道)側もまた、曾我兄弟(鎌倉初期)の墓などがある富士山麓を通っていますので、こちらも部分的には使われてはいたのだと思われれます。私が興味を持っているのはそのもつと昔の東海道で、古東海道ですからこの道ではないのです。ヤマトタケルも源義家(八幡太郎)も源義光(新羅三郎)も実は足柄峠を通っています。

このため、この足柄峠に多くの物語が残されています。その道は沼津から今の御殿場線に沿って北上し、御殿場から足柄峠を越えて小田原に下る道です。足柄峠から見る富士は絶景だといえます。

古東海道がこの足柄峠を越えていたのは確かかと思われませんが、過去に富士山が大噴火してこの峠が通れなくなった記録が残されています。

1万年以上前の話は置いておくにして、3000年

ほど前から富士山は何度も火山として爆発的な噴火を起こしています。大和朝廷の成立後の記録に残っているものとしては

・800～802年・延歴大噴火：これにより足柄峠越えが一時閉鎖され箱根峠越えの道が使われた。しかしこの足柄峠の道は復旧されて復活。

・864～866年・貞観（じょうがん）大噴火：これに剽り青木ヶ原が形成され、富士北麓にあった「の海（せのうみ）」が埋まって、その一部が精進湖、西湖になった。（貞観大噴火は貞観地震の5年前）その後何度も噴火を繰り返しています。

・937年（承平噴火）、1033年、1083年、1435年、1511年：最近の大きな噴火は江戸時代で1707年の宝永大噴火です。この時は富士の中間部が大きく崩落し、江戸市街に大量の火山灰が降ってきたといわれています。

延歴大噴火でこの足柄峠の道が溶岩で通れなくなり箱根を通る道が作られたのですが、数年後には足柄峠道が復活してからはまだこちらがメインの通りとなっていたようです。

さて、人間はあらゆる動物に対し、その頂点に立つて支配していると思うことは驕りであり自惚れにすぎません。エボラ出血熱、デング熱などその人類の驕りに対する警鐘にすぎないのかもしれない。

今回の木曾の御嶽山が噴火して犠牲になられた方々には自分がその場にいたらと思うとそのご家族の悲しみや悔しさは推し量ることもできないものと思います。しかし自然の成す脅威はこれからも必ず起きるでしょう。

昔の東京は湿地帯で人も住めない場所でした。

東海道もそのために陸地を通らずに東京湾を渡っていました。そこを海のほうまで広げて開発して多くの人が暮らしているのはあまりに危険だと考えずにはいられません。銀座に柳を植えたのも湿地帯に柳がよく育つためだったそうです。このような場所は大地震で液状化が起こり地下鉄などどのようなことになるか見当もつきません。

被害を小さくするためにはリスクを分散することが求められるのです。しかし地方に新幹線を建設して地方再生などということは全くの幻想にすぎない。今の都会への一極集中がさらに進むだけだ。

大久野島

小林幸枝

瀬戸内海にある大久野島をご存知でしょうか。野生のウサギが多数生息する島として知られ、多くの観光客が訪れているそうです。

かつてこの島は「地図に消された島」と呼ばれていました。何故？と興味を覚えて調べてみました。

大久野島は、広島県竹原市忠海町の沖合3キロに位置し、数戸の農家が耕作を行っていた島でしたが、昭和2年に陸軍が毒ガスの製造を目的に、その管理下に置きました。昭和2年は太平洋戦争が始まる14年ですが、当時すでに毒ガスはジュネーブ条約によって製造が禁止されていました。

しかし、陸軍は秘密裏に製造を行ったのだそうです。そのため、戦争中にはこの島は地図から消されていたのだそうです。

毒ガス工場には地元の農民や漁民、勤労動員の学生6500人が、一定の養成機関を経て作業に従事させられていました。毒ガス工場へは、国家総動員法の徴用令状によって集められた16～17歳の若者達だったといえます。

徴用令状は、軍隊への召集令状である「赤紙」に対して「青紙」と呼ばれていました

工場従事者は、憲兵から島で見聞きしたことは外部に話すことを禁じられていました。戦後は、毒ガス工場であった事が公にされ、そのため働いていた事が知られると本人家族たちが差別を受けるのではと心配し口を閉ざしていたそうです。この事が初めて報道されたのは戦後40年が過ぎた1984年のことだというから驚きです。

勤労奉仕で工場に従事した当時の女学生は、大久野島で何を製造しているのかは知らされていなかったと言う。黒く焼けた鉄色の顔、目の縁が黒くなった顔、ガラガラ声の工具さんの姿を見て、何とも言えぬ不安を感じ、何か良くない物が製造されていると思ったという。

元徴用工は、帽子に浸透した毒ガスがほんのちよつと頭に触れた2時間後、頭痛が始まり、三日三晩にわたり七転八倒したと言う。金槌で殴られ続けている様な痛みだったそうだ。激しい痛みに襲われて初めて自分の作っている物の恐ろしさを知ったという。その時、医務室にいた軍医から「手当は出来ない。手当てができる様では兵器ではない」と言われたそうです。

元中学動員学徒は、顔は黒く、目は赤く、肺はただれ、集会の折り、駆け足で来る第2工場（イペリット）の人達は咳が止まらず、血を吐いていたそうだ。

退職を願った人は、憲兵がやって来て責め立て、殴打するので毎日泣き泣き自転車を向上に走らせたと言う。

大久野島での仕事の内容や起きたことは一切外部に喋らないよう、誓約書も欠かされたという。戦争が終わって不要となった毒ガスや化学兵器は大久野島の地中に埋め込んで処分されたり、毒ガス工場は火炎放射器で焼却されたり、周辺の海域へ投棄された。大久野島では今でも化学兵器の成分が検出されると言う。

近年は多数のウサギが生息することで、ウサギ島と呼ばれているが、このウサギは実験体として使われていたものが脱走して繁殖したものだと言われたが、実際には地元小学校で飼育されていた8羽が野生化して繁殖したものである。

現在は、年間約10万人の観光客が訪れる「ウサギ樂園」として知られ、一部のウサギ好きの聖地ともなっている。また国民休暇村としても多くの人の憩いの場になっています。

毒ガス工場があったこと、知らなかった。でもそのことを知った今、毒ガス製造の非人道的な事を、戦争と言う非人間的な争いを二度と起こさないことを一人一人の心に刻み込んでおかなければいけないと思う。

自由がなくなつた

伊東弓子

あの日から俺の自由は無くなった。役所から男二人が来た日からだ。婆さんは済まなそうに頭を何度も下げている。ずっと野放しにされていた訳

ではない。ここに来たあの晩から首輪をして繋がれ腕はいたのだ。俺は何とか自由になりたくていて、動いたり引つ張ったりしている中に首輪から外れた。それを覚えてからは為て遣ったり、愉快、爽快、いい気持、何度も逃げ出して自由奔放に走り回っていた。誰かチクツタに違いない。婆さんには本当に申し訳ないと思う。

その晩から首輪の穴が一つ増え、俺の自由への脱出は出来なくなった。悪さをした覚えがないけれど、何で：と不満はあったが、花の咲き乱れる彼女の家に行ったこと、虫や鳥を追って走って愉しかった日々が再びくることを願って観念した。名なしの野良君もこの家の一員として「いづみ君」となった。

斯うなつてはどうしようもない。せめて散歩の楽しさに期待しよう。諦めの境地でいるのに婆さんの一人言のような、俺への慰めのような言葉が聞えてくる。

「いづみも気の毒だけど落ち着いてね。私は出歩いている毎日だけど、いつの日かで歩くことも儘ならない日がくるのよね」

そう分かつてんなら俺との時間をつくって欲しいなあ。じつとして時間が多くなると物思いに耽ることも増えてくる。

如何して此処へ来たんだったかな。来てよかったかな。あの晩くっついてこなければもつと自由でいられたらうに。思えば一寸した放浪の旅があった。八月に入って間もない夜だった。「タロン」の近くからこの家の婆さんと孫にくっついて此処に来た。

「この犬、いづみ荘の奥さんの言っていた犬かな」

俺のこと満更でもなさそうだったから、ずっとついてきたんだ。

ある朝、婆さんの妹が孫と寄った。「あらこの犬だわ。山王川で泳いでいるのを孫が見つけて遊んでたのよ。人懐っこい犬でね、オテやオスワリも出来るよ」

と俺の印象も悪くなかった。そして盆近く墓掃除に行った時、若い坊さんに再会した。坊さんは婆さんに事の次第を話していた。

「この二、三日の中に姉弟のところを一回りしたなんて不思議だね。縁があったのね。大事に飼わなくちゃね」

と孫と話している。どう大事にしてくれるんだろう。盆が過ぎた頃、大井戸から帰ってきた婆さんが、

「いづみは大井戸の方にもいたんだってよ。白い靴下履いて、とってもいい子だったって、褒めてたよ」

俺はいつもいい子だ。当りまえだ。褒めの言葉より自由が欲しいね。その前の俺のことは誰も知らないだろう。生まれがいいとか、育ちがいいとか、良く言ってくれるが、自由の方がいいな。

夏休み中は良く散歩をしてくれた。が婆さんも孫も気ままにやってくれていた。途中で放してくれたのだ。自由が与えられた喜びは大きかった。

暑さから逃れる為、水の流れに入って水を飲み、体を冷やしい気持ちだった。細かい水草が体中について変身したような気分だった。夜の堤防は長い時間かけて歩いたり、走ったり婆さんや孫の心のゆとりを感じた夜だった。

放してくれたのは嬉しいもの、すぐになんか帰れるか。帰ってこない俺に苛立って婆さんが文句

を言っていた。

「本当に仕様ががない。勝手にどこかへ行っちゃまった。帰ってきたら、うーんと叱ってやろう」だって放してくれたんだもの、俺が悪い訳じゃないよ、と言ってやりたい。婆さんの後ろにさっきから座って聞いていた。何気なく振り向いた婆さんはびつくり「あら、いたの」と苦笑いをしていた。全く勝手な言いぐさだ、と俺も呆れた。

夏休みも終わり頃、婆さんが友達と話していた。「暑さと犬とあの子供達との紛争で疲れたわ。胃も痛いみたいよ」

まるで全部おれのせいみたいだ。呆れたもんだ。友達にも合わなくなったと淋しい思いだ。洋服なんか着ちやうって得意そうに歩いたやつもいたけど、どうしたかな。

お坊ちやま、お嬢ちやまでお座敷住居の人種というか犬種もいた。広い屋敷を走り回り束縛の中にも、自由を持っていて羨ましいやつもいる。

毎日きちんと散歩している隣の年寄犬、同じく爺さんも年老いて、ゆつくりしたテンポで歩いているやつに「おい元気かい」と声をかけても返事はこない。

散歩時、出合った人同士、犬同士が話しをするのも友達になれるよい機会だ。

俺の身近な人間は俺とどう向い合ってくれてるだろう。練くんは俺の力の強さに一寸不安のようだ。まあちゃんも犬の扱いをよく心得ている。ママは一番優しい、忙しい中で時間をつくってくれる。兄ちゃんも犬を飼う心得を皆に確り話し、注意してくれる。婆さんは怒ることが多い。まあこれからも仲良くしていこう。

秋の彼岸中は、動物愛護週間とかいうが、茨城

県は犬の扱い方に関しても「ワースト・ワン」とか、幾つもの「ワースト・ワン」が多いが、これも茨城県民性の問題。人間の問題だ。

犬には犬の生活があった筈だから、犬らしく生きていきたい。今は人間との共同生活だから仕様ががない。俺も我慢しなけりやならないことも多いだろう。しかし、自己表現は確りするぞ。婆さんも元気でやってほしい。歩ける間は歩き、自転車に乗れる間は自転車で精々楽しんで活動するとい

い。自由を奪われた俺への時間もつくってな。

石岡のおまつり二〇一四

兼平智恵子

石岡のおまつりまで後三五〇日と、石岡市街地の皆さんは来年のおまつりまで待ち焦がれて過ごします。

去る九月十三、十四、十五日と行われた今年の石岡のおまつりは「石岡のおまつりには必ず雨が降る」のジンクスを返上、好天気恵まれ約四十七万八千人（石岡市観光課より）のお客様をお迎えしました。

我が家では子供や孫の帰省もなく、十三日の神幸祭には坂東市から四人の皆様、そして還幸祭には柏市からの三十人の皆様への歴史ガイドとおまつりのご紹介のお役目を頂きました。

坂東市からの皆様は来年一月に四十名様の団体で、初詣として常陸国総社宮参拝と石岡の歴史を訪ねる為の下見とおまつり見学兼ねてのご来市でした。国分遺跡のあるイベント広場で十一時の待

ち合わせ、そして国分僧寺跡の見学、寿し長さんでの昼食、神幸祭の行われる總社宮に一三時に到着。拝殿では「神幸祭発興式」が行われておりました。拝殿での儀式の後、本殿から白布で囲まれた御祭神の御分霊が大神輿へと遷される「御霊遷し」が行われ、その後露払いのささら、獅子の舞が奉納され、「神輿衆」がお祓いを受け、予定時刻十四時に宮司さまが大神輿の出御を宣言し、午後二時の花火を合図に一斉に祭礼のスタートです。供奉行列は露払いのささらと獅子の後に、猿田彦を先頭に続きます。その後、旗、鉦を持った列が進み続いて祭礼委員会の皆さんが紋付袴姿で続きます。

ギター文化館

2014 CONCERT SERIES

- 10月 5日 村治奏一 ギターリサイタル
- 10月18日 長谷川きよし コンサート
- 11月 2日 樋浦靖晃 (G) & 芝草幹夫 (FL) コンサート
- 11月 9日 里山と風の声コンサート 亀岡三典 (G)
- 11月16日 おがわゆみこ オカリナコンサート
- 11月30日 スペイン歌曲コンサート
黄子珊 (ソプラノ) & 角圭司 (ギター)

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

坂東市の皆様には残念ながらささらと獅子の奉納舞が人混みの中、背伸びしながらの見学だったことが、案内不足と悔やまれました。そして参道での供奉行列を見学なされて十五時頃には、来年一月のご来市をお約束してお帰りになりました。

三日目還幸祭のお客様は昨年ご来市のはずでしたが台風で断念、再度の挑戦でご来市頂きました柏市の三十名のみなさんでした。JR線でご来市、十時半見学開始、二班に別れ、登録文化財を中心に總社宮、国府跡、府中城跡、府中藩主松平墓所、そして十二時半、昼食の寿し長さんまでのご案内でした。

午後からはおまつりを自由にご見学との事で、後に幹事さんからの電話で、還御の供奉行列の見学や、遅くまで祭りの賑わいに浸った方々等楽しかった事のご報告を頂き、一緒に案内した歴史ガイドの会員さんと喜びあいました。

還幸祭にもう一つの嬉しい事が届きました。折角常陸風土記の丘までいらした埼玉県川口市の珍しいお名前の下赤様という方が、市内はおまつりでお賑わい、車での乗りいれは困難でしょうとの助言で断念して帰りましたが、その助言してくれた方が兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」を手にしていたのを見て、是非送ってほしいとのお電話でした。

下赤様は一回目のご来市の時、石岡市民俗資料館で私の名前を覚えて下さっていました。早速送らせて頂きましたところ、「ふるさと散歩で、石岡の歴史を学んでから参ります」との嬉しいお言葉と、下赤様が二四年前に童帰会という同窓会にて発表なされた詩を送って下さいました。

その時代の社会情勢や下赤様の力強い人生の歩

みに感動し、ふるさと風の会でも是非に発表させて頂きたいと、以下に紹介させていただきます。

我が人生五十年 朝日北分会 下赤 昇

青年よ大志をいだけの心境で
青い麦畑から ひばりが飛び立ち
母校よさらばと大都会へ
敗戦後の 我が家の経済は苦しく
進学したくも金は無し
口べらしのために就職へ

日本経済を建て直す 我々は企業戦士なり
金のタマゴともてはやされ
資本主義社会の奴隷となり
薩摩の地より大阪へ
流れ着いたよ 埼玉の地
はや三十五年も過ぎ去りし
常に思うは ふるさと 鹿児島

我が胸の 燃ゆる思いに くらぶれば
煙はうすし 桜島山

歌に励まされ
常に胸では 闘志を燃やし
「苦進楽観」の言葉が大好きで
今では 世のため人のため
いずれは自分に返ってくる
信念堅く

埼玉土建の組合活動に 精一杯生きている

子供の頃に学んだイロハだが

ペンキ屋の職人三十六年
今では ハの字忘れて イロばかり
たまには 女の色で 苦労してみたい
それにしても もう五十歳

GNP二十%を生み出す 建設産業
経済大国日本の職人として
我が歩んでいる人生に 悔いはなし

下赤様有り難うございました。どうぞお元気でまたのご来市をお待ち致しております。
今年も熱く燃えた石岡のおまつり。私にとりましても皆さんとの触れ合いで優しさや情熱やお心に触れた熱いおまつりになりました。

・心に香りのオブラート金木犀揺らぐ 智恵子

【風の談話室】

日の移ろいの早さは年齢に比例するようです。100号を発行し、100号祭が終了するや直ぐに102号の編集・発行がやって来た。この慌ただしさは、恐らく何処まで行っても終わらないだろうと、些かの溜め息も交じる。さて、今回もこの談話室に二人の方から投稿を頂いた。先月号に続き新しい方からの投稿が頂けた。この風の談話室も少しずつ認知されてきて、多くの方から投稿を頂ける予感がする。

今回は101号。新しい再スタートが迎えるように新しい方からの投稿は大変うれしい事である。

《読者投稿》

養生日記『日々の景色』

堀江実穂

最近家でよく自分の人生について考えることがある。自分自身のパーソナリティーとかアイデンティティーとかについて。

病気になる前は、いろいろと夢を持っていた。しかし、今は保育士の仕事を全うする訳でもなく、子供の成長していく姿を間近に見て喜べる訳でもない。すべてが「統合失調症」という病気によって人生の設計図がごとく崩されてしまったのである。でも、病気になってしまったものは仕方なく、くよくよと悩んでいても前には進まない。漸く、今の置かれている状況の中で一生懸命生きていくことから再スタートしようと思考のスイッチを切り替えることが出来る様になった。すると気持ちが楽になり前向きな生活が送れるようになってきた。

今、私はデイケアに通所している中で、ひだまり委員の副会長をしたり、デイケアで運営している100円喫茶「やすらぎ」のアテンド副部長をしている。この役割を果たして行くことで自分自身の中で失われかけていた自信と自尊心を保つことが出来ている。それはお金には変えられない大切な気持ちであり、心構えである。

デイケアでは実際にカラフルで充実したプログラムが用意されている。それは日々違う運動療法であったり音楽療法、料理、脳トレ、ペン習字、農作業、手芸、そして喫茶など、心を豊かにさせてくれるプログラムを毎月考えてメンタル面での回復を促してくれている。

小さな目標ではあるけれどそうしたプログラムに毎日休まず参加することによって、自分自身の精神の安定をはかり、社会復帰への歩みを続けている。

毎朝起きて、窓から変わらぬ風景をみることによって、今生きている自分を感じとっている。

絶対に許せない！

高木千代美

ニュースを見て全身が怒りに震えてしまった。視覚に障害を持つ人をサポートして歩く盲導犬、オスカー。オスカーは、全盲の男性のパートナーとして毎日の外出をサポートしている。

この盲導犬オスカーが心無い人に先の尖ったもので数カ所も刺され、着ていたシャツに血が滲んでいたという。オスカーは、刺されても吠えることもせず、出血の痛みにも耐え、男性に付き添って歩行のサポートをした。

男性がオスカーの怪我を知ったのは、職場に着いてからだった。直ぐに警察に連絡をしたが、警察も非常に悪質だとして、「器物損壊容疑」で捜査を開始した。

でも、何かおかしくないか!? 盲導犬を刺傷して「器物損壊」とは。

こうした悪質な犯行はこのオスカーだけでないという。人間は決して危害を与えないと教え込まれ、人間に決して吠えたり抗ったりしないと仕付けられている盲導犬に対して、顔や頭にマジックで悪戯書きされたり、タバコの火を押し付けられたり、わざと尻尾を踏んだり、蹴られたり、目の見えない人が連れてくることを知っての卑劣な犯

行は日常茶飯だという。

こうした卑劣すぎる行為は決して許してはならない。盲導犬への卑劣な犯行の報じられたすぐ後に、今度は全盲の女性の足を後ろから蹴るように踏んだという事件が起こった。あまりにも情けなすぎる行為である。

また、目の見えない人が白杖を地面を叩きながら歩くのを喧しいと言う人がいたとの報道もあった。これは目の見えない人が此処に居ますと知らせる合図でもあるのだ。

幼い少女をさらって殺してしまうなどの事件も多発している。自分だけが良ければ、楽しければ、他人が困ろうが悲しもうがどうでもいい、そんな社会になってしまふのだろうか。

疑うことを知らない幼い子供、障害を持っていても一生懸命生活している人達、皆が安心して暮らせる日はもうなくなってしまったのだろうか。

それではあまりにも悲しいことです。

今回初めて投稿を頂いた高木さんは、襲撃の方であるが、盲導犬への悪質・卑劣な犯行には、自身の社会生活での経験を通して卑劣などの言葉には言い表せない程の、怒りや悲しみを覚えたことは、想像に難くない。

この編者、家に保護したお猫様、お犬様と同居しているのであるが、こつした犯行には強い憤りを覚える。

あまりにも幼稚で情けなすぎる犯行であるが、法的な整備の遅れ過ぎていることにも腹立たしく思うものである。

《一寸一言・もう一言》

||一寸一言||

蚊除け策載

今年¹⁸はデング熱騒動で列島は揺れた。9月²⁰日現在¹⁸都道府県で141人が感染。デング熱は日本では太平洋戦争末期²⁰20万人ほどの発病歴があり、以後輸入症例として毎年¹⁰⁰100名くらいの発症報告があったが、海外渡航歴のない発症例は⁶⁹69年ぶり。デング熱は東南アジアの風土病。これが世界に広がり、マラリアに次ぐ被害。毎年1億人が感染し50万人が入院し、25000人ほどが死んでいる。対策は本州以南どこでも起こりうるのでまず蚊に刺されない事。肌を露出せず、水溜りをなくし、殺虫剤・虫よけを有効に使用する。

本病は人から人へは直接感染しないが、ウイルスを持つ人の血液を吸った蚊(ヒトスジシマカ)が別の人を吸血する際、感染が成立する。この蚊は犬のフィラリアの媒介者でもある。マラリアは世界中で2億人が感染し、毎年²⁰⁰200万人が死亡。更に狂犬病は死亡率¹⁰⁰100%で、日本では犬の予防注射率は⁷⁰70%。実際はその半分ぐらい。法治国家が泣く。世界の狂犬病死者数は毎年50000人。

私は1997年国際協力で中米に滞在中、プロジェクトの殆ど全ての日本人がマラリア(三日熱)に感染したが私だけが全く感染しなかった。理由はJICAの熱帯滞在心得をバカ正直に守り通したからである。それは①半袖半ズボン禁止、②夜は日本から持っていった蚊取り線香を燃やし続ける、③酒を飲んでフラフラうろつかない、④予防的に毎日キニーネ剤を飲む。こんな基準を守り通

すのは真に苦痛。熱帯なのに長袖・長ズボン?病気でもないのに毎日薬を飲む?私は帰国後、癌に罹り、マラリアの感染否定が手術の条件。それが全く感染しないことが判明し手術を受けた。

地球温暖化により熱帯の病気が簡単に中緯度地帯に入り込むのは真に危険である。殺虫剤の乱用はすぐ抵抗力を増す。そして耐性菌に手を焼き、人類が滅亡するとしたら、敵はあんな小さなバイキンや虫けらであろう。

約束の行方

打田昇三

一時期だが社会党が政権を担っていた頃に首相がシリアを訪問し、パルミラなどを見学して遺跡保存の資金を援助する約束をした。しかし政権交替が早かった所為か、日本は約束を守らなかったと思われる。現地在住の日本人から嫌味を言われたから本場の事であろう。

パルミラは、オアシスの集落から発展して都市国家となりシルクロードの至宝とまで言われた。シリアは日本の半分ほどの国土を有するが20%は砂漠であり、パルミラは其の中央部に位置しているからオアシス業としては最適の場所に在ったことになる。旅をしてきた隊商は、城壁で囲まれたパルミラに泊めて貰わないと賊に襲われるから、此処を利用するしかない。次第に発展して軍隊も持つようになり、女王ゼノビア時代にはシリア全土を抑えエジプトまで進出して景気が良かったがローマ帝国と戦って破壊された。

アサド政権が頑張っていた頃のシリアは平和維持の名目で隣国のレバノンに進駐して動こうと

しなかった。日本の新聞にも「シリア軍はレバノンで何をしてくれた?」と書くほどであったが、今は内線やらゲリラの活躍?で中東には近寄れず、遺跡も破壊が進んでいるであろうから、日本が援助の約束を守らなかったのが正解になるのかも:。

||もう一言||

2千年間最大の発明

菅原茂美

先日白井先生が首題の本を貸してくれた。アメリカのある出版界の編集者が、インターネットを通じ、世界の知識人にアンケートで、「この2千年間で最大の発明は何か?その理由は?」と発信したところ、他人の答えを見てから自分の考えを回答する事ができるので、その批判は痛烈なものであったという。最も多く寄せられた回答は、ドイツのグーテンベルクが1455年に発明した「可動活字による印刷機」。ところが、グーテンベルク以前に、1041年中国の錬金術師畢昇(ひししよう)の印刷機の例や、遺跡発掘でBC1700年頃のミノア文明のクレタ島に粘土細工による可動活字による印刷機は存在していたと早速クレーム。更には文字の発明がより重要だとか、紙やインクの発明がなければ印刷はできないとか、40歳以上の人が本を読むためのメガネの発明がより重要。そして印刷した重い本を運ぶためには、荷車の発明、更に馬車を引っ張るのに野生の馬を6000年前に家畜化したウクライナの住民が最も文明の発展に貢献したという人さえ現れたという。

そこで²¹21世紀に最も重要な発明は何か?と問われれば私は「ブーメラン式破壊兵器自爆システ

ム」と答える。戦争好きな人類はこれまで次々飛び道具を發明し、不毛の戦いを続けてきた。ブーメランはもし標的に命中しなければ、手元に帰るといふ世界に類を見ない優れたもの。そこでこの原理を応用し、地球表面の緯度・経度30度ごとに静止監視人工衛星（計算上60個）を国連が配置し、地上で砲弾・ミサイルなど発射があれば、人工衛星が直ちに傍受。即、強力な電磁波を発射し、砲弾などが直ちにUターンして発射元を必ず破壊する。これで世界から戦争はなくなる。もしこれでノーベル賞をもらったら、私は賞金の全てを「風の会」に寄付する。

《ことば座だより》

演劇表現について (3)

白井啓治

99号、100号に続き、今月も舞台における表現学について述べてみたい。今回は、俳優表現、舞踊・舞踏表現、演奏表現などに不可欠な技術であるイメージングについて。

イメージという言葉は生活の中のあらゆる場面で使われている。特に芸術、スポーツの分野ではその意味、実態についての知識がなくても非常に重要視されて使われている。乱用されていると言っているほど多用されている。

いい演技をするためにはイメージは不可欠だ。優れた演奏を行うためにイメージは不可欠であると誰もが口にする。しかし、イメージって、と質問すると明確に答えられる人は少ない。

ではイメージとはいったいどういうことを意味

するのであるか。

まずは辞書を引いてみる。イメージを辞書に引くと「心の中に思い浮かべる・もしくは思い描くこと」というように出ており、日本語で言う「想像」と同じ意味に位置付けられて書かれている。誰もが使うイメージ・アップ、イメージ・ダウンなどの言葉は、印象という意味で使われている。我々日本人が日常生活で多用するイメージという言葉は実に日本人らしい曖昧語になって使われている。

ではイメージの実際の意味について、心理学における定義にみてみよう。心理学におけるイメージとは「記憶情報としての知覚体験を心の中に再現、再構成、創造された類知覚体験である」と定義されている。しかし、この定義が心理学会で説話化された定義かどうかは小生の勉強不足で断言はできない。

記憶情報化された知覚体験を心の中に再現、再構成、創造された類知覚体験、とは実に分かりにくい、解説すると「知覚、即ち視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という感覚器官によって感じ取った体験情報としての記憶を、頭の中にそっくり再現させる事によって、実際に体験したと同じ体験をさせる、もしくはする事」を言う。何故このように定義されているのか、その理由をみてみると、頭の中で再現された知覚体験は、鮮明に描くほど実際の知覚体験した時に生じた生体反応と同じ反応を生ずるといふ検証結果に基づいているのである。このことからイメージとは、類知覚体験することを言うのである。類とは「同じ」「同等」という意味である。

ところで一般に、人間の知覚体験としての情報

の80%が視覚から得られたものであると言われている。そして視覚以外の情報は、視覚情報に付加されるように記憶されると言われている。実際に臭いに関するイメージを想起しようとするとき、臭いを発する物体を先ず視覚的にイメージして、視覚映像が鮮明になるにつれ、臭いが思い起こされるものである。こうした側面からみた時、イメージとは視覚体験を核として他の聴覚、嗅覚、味覚、触覚を連鎖的に想起する類知覚体験であると定義することが出来る。勿論、視覚に障害を持つ人などは、中核となる聴覚を核にして心象像を想起する事になる。

演技や演奏に於いてその表現の幅や奥行きを考えた時、表現者自身の心を持つ物語像をどのように創り上げるかは非常に重大問題である。

人間の行動表現は知覚体験の再現であると言われている。経験のない事は行動表現としての再現は出来ないのである。しかし、現実には未体験のことであっても行動としての表現を創ることが出来る。それは、これまでの知覚体験とそれに基づいて導き出された仮説想像・空想を頭の中・心の中にイメージという形で実現させて、それを知覚体験として持つことが出来るからである。

この架空の、想像の物語像を構築し知覚体験させることをイメージングと言い、このイメージングによって一つの台本や譜面に無限大の表現を与えることが出来るのである。

私自身が脚本家であるから、自己弁護で言う訳ではないが、脚本だとか作曲された楽譜というのは作品としては完成されたものではあるが、物語としては未完成なものである。脚本や楽譜を完成した物語として表現するのは、俳優であり演奏家

である。

脚本や楽譜には物語の条件としてのストーリー展開、基本人物像については書かれてあるが、それを心の襞を持つ物語と人物に仕上げるのは俳優であり奏者なのである。

そしてこの俳優や奏者には、物語の作者とは違った表現者としての広がりや発展が求められる。表現者としての広がりや発展を作り上げていくのが、イメーシングという作業なのである。

小林が内弟子の様に私の所に来た時の一年間にこうした話を書いて与えたのであったが、イメーシングについてを改めてここに書いてみると、私自身が頭の痛くなる話であるし、書くこと自体頭が痛くなり非常に疲れるものである。

イメージに関することは、論文にするともっと書かなければならないことがあるのだが、イメージとはこんなことを言うというのだ、という概略でも理解していただければ幸いである。

イメーシングについては、スタニフラススキーの現代俳優術に始まり、現在では人間行動と習熟のあらゆる側面において研究がされている。今はもう最新の文献を読む事はないが、イメージの世界というのは非常に興味深く面白い世界である。

私自身は、プロゴルファー志願の青年にイメージトレーニングの重要性を指導するために、俳優術以来の勉強を始めたのであるが、面白い学問ではある。でも、今はもう学ぶ根気がない、というか体力的に持たないというか……こうして思い出したように書いてみるのが精一杯である。

この1001冊を編集している時に、訃報が届いた。

ふるさとルネサンスの頃に、一緒に朗読劇を作り、この会報を立ち上げるときにも応援してもらい、原稿も書いていただいた山重幸兄が4月に亡くなったことをお嬢様より連絡を頂いた。会いに行かなければと愚図愚図している中に機会を失ってしまった。山重幸兄の「冥福をお祈り申し上げます」。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第二 (2-1)

一九八五年代に、イタリア文学専攻の東大教授が現地の大学に行き「平家物語」の講義をされたそう、その先生のお説によれば叙事詩として「平家滅亡」が語られる場合に物語の主人公になる人物が三人居り、前半が平清盛で中頃が木曾義仲、そして最後の部分が源義経であろう……此の三人の視点で物語が動いて行くことにより優れた作品になっている……というのである。そういう見方をすると自尊心の強い源頼朝からは苦情が出そうであるし、また「祇園精舎」から始まり「一行匪蘭梨」などと言う怪しげな名前の坊さんが出て来た今までの平家物語では、主役とされる割には平清盛の出番が少なかったようにも思えるのである。

かつて、フランスのドゴールと言う有名な大統領が孫の少年に「将来は何になりたいか？」と質問したところ、少年が胸を張って「僕も大統領になりたい！」と誇らしげに答えた。途端にドゴール爺さん是不機嫌になり……大統領は一人でいいんだ！と叫んだ……英雄は常にお釈迦様並みに「天上天下唯我

独尊」を堅持していなければならないから誰もがライバルに見えるのであろうか。

「平家物語」の作者も巻二になって、ようやく其のことに気が付いたかどうか知らないが、本来の主人公である平清盛が、車庫から出て本線の軌道に乗り出したことになるのが是からの平家物語であり、今回最初の章段は「西光被斬」である。

そういう事情もあって、国文学専門の先生方によって此の章段を「平家物語中の白眉（はくび＝優れた作品）」と評する意見もあり、やっとながら頭に描いていた（……思い込みも有るかも知れないけれども）イメーシングらしい平清盛が出てくる。時代で言う高倉天皇の治世、西暦一一七〇年代であり「西光被斬」は一一七七年の初夏の出来事である。この章段は巻第二、最初の「座主流」と全く逆の舞台になる。後白河法皇を中心とした朝廷内の権威と、神仏の威光を掲げた比叡山の勢力と、平清盛が擁する武力とのバランスが何となく不安定になった結果、「出る杭は打たれる」何とかして平家の力を弱めたいと願う後白河法皇の意図を体し（その実は自分の息子たちを訴えて流罪にした僧兵軍団に対する報復行為として法皇側近の西光法師は比叡山延暦寺の明雲座主を流罪にすることが出来たのであった。明雲は平清盛が推薦した人物なので憎い清盛にも恥をかかせ、清盛失脚に繋げる「一石二鳥」を期待したのであろう。

是に依り流刑に処せられた息子の仇を討つたようになつてもりでいた西光であったが、思いも掛けぬ僧兵の逆襲で明雲を奪い返され、さらには予想もしなかった人物の裏切りから自分が主催した「平家討伐の密議」が漏れてしまった。万事休す、仏教的に言えば「明雲」と言う高僧を陥れようとした報いで自分の命運が尽きるのである。

物騒なタイトルであるが内容も荒々しいものであり話も長い。平家打倒の密議が漏れて、関係者が逮捕処罰される。然も遠方に流されるだけでは済まずに首を斬られて方角が分らなくなる者が出る…その代表者が「西光こと藤原師光(ふじわらのもろみつ)」である。此の男は藤原系と言っても京都市役所の戸籍係に「おまへんなあ」と言われるような阿波国の下級武士出身らしいが(学者に依っては藤原成親の同族としている)都に来て母親が藤原通憲(出家して信西、後白河天皇近臣の学者であり平治の乱で敵方に殺害された)の乳母となったことから後白河院政グループに入り込み、遂には法皇第一の側近として権力を欲しい俥にしていた。中途半端な切れ者として恐れられていたのに斬られるようになってしまったのであるから政局の激変と云うか事態の急転による人の運命の行く末は誰も予測が出来ないのである。

前章段で、伊豆国に流罪と決まった明雲大僧正を比叡山の僧兵たちが奪い返した…と言う事件は早速に後白河法皇の許に報告されたから、法皇が憤慨したことは当然であるが、それに付け込むように西光法師が法皇に余計な助言をした。「…比叡山の僧兵たちが我が俥から無法な訴えをすることは今に始まったことでは有りませんが、特に今回の事(大僧正の奪還)はもつてのほかの所業であり、是程の不法行為は聞いたことがありません。(法皇におかれては)厳しく御処断をなされますように…」と焚きつけたのである。

比叡山の訴えで二人の息子が処罰を受けているから僧兵が憎いのは分かるが、非は息子の方に有った。政治を私物化してはいけないけれども八百数十年

後の現代でも、そういう政治屋が居るらしいから西光ばかりを悪くは言えない。しかし平家物語には西光が悪の権化のように書いてあるからそれに従う。

これは、その後、一週間も経たないうちに西光自身が地獄に落ちることになるのに其れを知らず比叡山延暦寺に祀られた山王大師の神慮を憚ることも無く、自分勝手なことを申し出て後白河法皇の心を乱したのであるから自業自得。中国の書にも「他人を中傷する家臣は国を乱す」と書かれている。諺にも「叢蘭(そうらん)を茂(も)か覽(らん)とすれば、蘭(らん)が破(やぶ)り、王者(おう)明(めい)かな覽(らん)とすれば、讒(ざん)臣(しん)これ(これ)を暗(く)うす」蘭(らん)が生(い)い茂(も)り芳香(かう)を漂(ひら)わせているのに、秋風(あきかぜ)が無情(むじやう)に是(こゝ)を妨(さ)げらるる。王(わう)者が正(ただ)しい政治(せいざ)を行(こ)おうとするのを邪(よこしま)悪(あく)な家臣(かしん)が是(こゝ)を妨(さ)げる」—とあるのは、この様な場合のことを言うのであろう。

此処まで悪く言われるのは西光の評判が一般的に悪かったからであろうか。尤も平家物語が仏教関係者の著書だとすれば、仏教の敵に対して良くは書かない。いづれにしても西光に言い含められた後白河法皇は、新大納言の藤原成親以下、側近の者たちに比叡山を攻める(僧兵が努力をして奪い去った座主を再逮捕)するように命じた。其のことは直ぐに延暦寺に伝わったため僧兵たちは集まって対策を協議したのだが、前の場合と違い意見が分かれてしまつて、中には「天皇が君臨しているこの国土で、その命令(此の場合は法皇の命令であるが、権力が天皇より上で有る)に背くことは出来(こ)ない!」と諦めて座主の引き渡しに肯定的なことを主張する僧兵たちも出て来た。

流罪の途中で救助(?)され、比叡山の明光房に匿われていた明雲大僧正は、僧兵たちの意見が分かれた(引き渡し賛成派も現れた)ことを聞いて「今度は、どのような目に遭うのであろうか?」と不安な日々を送

っていたが其の後に起きた(これから述べる)事件の所為で、再び流罪とする沙汰は自然消滅してしまつた。つまり裁判で懲役刑を宣告されたけれども、不景気で裁判所や刑務所が倒産し、裁判官などが夜逃げをしてしまつて、気の毒に被告だけが取り残されたような結果になつてしまつた。人生は何が起ころか分からない

そうした中で、新大納言成親は「鹿谷のこと」で述べた平家打倒の企てが山門の騒動(座主流)によつて実現出来なかつたため、暫くは個人的な野望を果たす機会を失つていた。言わばクーデターを起こす為の準備は進めていたのだが計画がお粗末で実際に協力してくれる武士の確保など肝心なことが遅れていた。そこに後白河法皇から比叡山攻撃の指示を受けたから其の為に預けられる軍勢を有効に活用して平家を討とうと思ひ付いた。これは後白河法皇の御希望にも沿えるし、側近の西光の思惑とも一致するので誠に好都合ではあるけれども俗な諺で「他人の禪(ぜん)で相撲(すもう)を取る」ような軽率・安直な考えであるから「反平家運動」もお遊びになつてしまふのである。

それに気が付いたのは「俊寛沙汰・鶴川戦」に登場して成親から白布五十反を貰つた多田蔵人行綱である。無理に頼まれて、と言うよりも、五十反の布に目が眩んで一度は承知した謀反計画ではあるが、座主流の騒動などで時期が経過していく中に「是はダメだ!」と思うようになった。どう考えても今の平家を倒すことなど出来る筈が無い…鹿ヶ谷の会合に参加した者の中で、戦闘能力のある武士らしいメンバーは自分ぐらいであるからもし失敗したら首謀者として最高の罰を受けさせられることになる…それは困る。そこで、本来は合戦準備用に貰つた白布

であるけれども、それを普段に着る下着などに平和利用させて貰って家臣たちに配り（物的証拠を消してから）どうしようかと落ち着きのない日々を送っていたのである。

物事は、客観的に見れば或る程度は正確な判断が出来るのだが、自分に少しでも思い込みがあれば気持ちは其の方向に傾く。多田行綱は考えた。：藤原成親は後白河法皇から預けられた軍兵を平家攻めに利用するらしいが、自分の家臣では無いと命令も伝わり難い。公家の成親が、比叡山に向かうつもりでいる軍勢に対して、本能寺の変で織田信長を討つた明智光秀のように恰好だけ付けて下手な号令で「敵は平家屋敷にあり！」などと叫んでも部下に「何で？」と質問されるのが落ちであり、とても上手くゆく筈が無い：であろうと。

その中に、もし謀反計画が漏れれば例え拳兵に加わらなくても罪に問われるから、そうならないうちに（他人の口から秘密が漏れる前に）自分から申告して首を斬られるのだけは防ごう：犯罪者でも自首すれば罪が軽くなると聞いた：と妙な覚悟を決めて、治承元年五月二十九日の夜更けに多田蔵人行綱は入道相国（長く言えば前太政大臣平入道清盛公）の居た西八条邸を密かに訪問した。平家屋敷は五条と七条の間の六波羅に在ったのだが清盛は別邸に居たらしい。京都駅の西の辺りと思われる。駅が近ければ便利である。

福原（神戸）に居た、とする説もあるようだが、源平盛衰記では、どうしようか迷っていた行綱が一周間ほど前に平家の屋敷を覗きに行った、とあるから神戸では無いと思われる。行綱が偵察に行ったとき、門前に数え切れないほどの馬車が止めてあり、大勢の人たちが出入りしていた。それと無く理由を聞いてみると、清盛など平家一門が集まって麻雀大会で

は無いと思うが何か遊びごとをされている—ということなので、其の繁盛ぶりに気後れた行綱は「是ではとても平家を倒すことなど出来ない」と観念したらしい。どちらにしてもキャンセルは早い方がいいのである。

それでも密告行為は後味が悪いから、多田行綱も真夜中に平家屋敷を訪れたのだが、その時間に他人の家を訪問するのは盗賊か暗殺者しか居ないから、清盛は宿直の家臣に「多田行綱と言う者が来ました」と言われても不審に思うだけで自分は会おうとせず、平家一門（家の子）で重臣の主馬判官盛国という老臣に「普段は来ない奴が来たのは怪しいから其の方が聞いて参れ：」と命じた。

盛国が行つてみると、多田行綱は怯えた様な眼をしながらも頑固に「入道殿に直接で無いと言えない重大事なのです！」と言うので、それでは致し方無い：と清盛は寝殿造りの屋敷の寝間から庭の釣殿（つりどの）庭の泉水に臨む建物）に通じる中門の廊下迄出て行つた。勿論、警護の武士は近くに居たであろうが、清盛が一人で目前に来たので行綱は改まって庭に平伏した。「この夜更けに何事であるか！」清盛が誰でも言うような苦情を言うと、行綱は謝罪もせず「昼間は人目が有りますから夜に紛れて参上しました」と言つてから「此の程、後白河院の近臣の方々が武器を揃え、軍勢を集めて居られることを、入道殿は如何に思われますか？」と、いきなり質問してきた。

「それは（明雲大僧正を匿った比叡山を攻められる為と聞いているが：）清盛が事もなげに答えると、行綱はさらに近くに寄つてきて、小声だが力を込めて「そうでは有りません！これは御当家に関わることと聞いております：」と心から案じているような

顔で言った。此の場合、「実は平家館に攻め寄せる為です！」とハッキリ言うべきなのだが、行綱としては自分の関与を隠す目的があるから、飽く迄も…：…：に聞いた話として然も現実性を強調して言わなければならぬから大変なのである。そうなると清盛も眠そうな顔では居られず思わず身を乗り出し「其のことは法皇も御承知なのか？」と一番に気になることを訊ねる。

「勿論です。藤原成親卿が軍勢を集めて居られるのも、其の為であり、院宣（法皇の命令）により実行されているようです：」と、行綱は他人から聞いたにしては詳し過ぎる内容で、やれ俊寛がこうで、平康頼がこうで、西光がこうでと自分が「鹿ヶ谷の山荘」で見えて来たこと、誘われたことを誰かに聞いたこととして然も大袈裟に言い付けたのである。源平盛衰記では「有ること、無いことを散々に中傷した：」ことになっている。行綱は言うだけ言うと、清盛の顔が陰悪になる直前に「：それでは私は是で失礼を致します」と逃げるように平家屋敷を離れたのである。貰った白布のことなどは口が裂けても言えないし、ぐずぐずしていて謀反人グループに編入されては堪らないからである。「大野に火を放つた心地して、人も追わぬに、とり袴して、急ぎ門外へぞ逃げ出ける」廣い野原に火を放つたような心持ちで、誰に追われた訳では無いが走り易いように袴の裾を持って門の外へ逃げ出した」と原文にある。

行綱から話を聞いた清盛入道は大（おお）に驚いた。内容が平家に対する謀反であるから入道でも蛸坊主でも驚きは隠せない。一刻を争う大事ととつて、真夜中ではあるが清盛は大声で家臣を呼び集め、腹心の平貞能（たいらのさだよし）を身近に寄せた。此の武士は平家物語巻一、「殿上闇討」で平忠盛を護るた

めに宮中に潜んでいた平家貞の子である。清盛は「不遜にも我が平家を滅ぼそうと企む謀反人どもが都中に満ち満ちている―速やかに一門の者どもに触れを回し出動させるように致せ!」と命じたのである。

これにより暗闇の中を平家屋敷から出た使者が八方に走り回って夜の明けぬうちに「吾身栄花」の章段でも触れた右大将・宗盛（右近衛大将・清盛の三男）、三位中将・知盛（宗盛の弟）、頭中将・重衡（知盛の弟、天皇の筆頭秘書官である藏人頭と近衛中将を兼ねていた者が頭中将、左馬頭・行盛（早逝した基盛の子）以下、平家一門の人々が完全武装をして（戦闘態勢を整えて）集まってきたのである。その数は六、七千騎も有ると見えた。此の場合、清盛の後継者・重盛が抜けているが、其のことは次の章段「小教訓（ぎょうくん）で説明される。「謀反の計画」とは言っても天下・国家の為ではなく、飽く迄も平家一門への謀叛であるから、正確には公使混同になるのであるが無視して大軍勢を集結させたのである。

其のうちに夜も明けて六月一日になった。多田行綱に起こされてから一睡も出来なかった清盛は未だ薄暗い中に、当時の警察に当る検非違使庁に使いをやつて検非違使の安陪資成（あべのすけなり）を呼び付けた。検非違使の長官は中納言相当の高官であるが、一般的に実行動を執る検非違使は国府の大掾職と同じく「四部官制」の判官職にあたる「尉（じょう）」であり、此の安陪資成も検非違使左衛門尉であるが、平家寄りの人物か…。

清盛は、慌ただしく出頭して来た安陪資成に険しい口調で命じた。「良いか、そなたは是から院の御所（後白河法皇の所）に参つて平信業（たいらののぶなり）法皇の近臣を呼びだし、必ず次のように申せ。―この度、法皇の身近にお仕えする者たちが平家一門を滅

ぼして天下を盗ろうと企てを致して居る。是らの者どもは一人残らず清盛が捕えて尋問を致すので、此の事には、どうか法皇御自身が関わらないで頂きたい―と」

言われた資成は急いで法皇御所に向かい平信業を呼んで清盛の言葉を正確に伝えた。平信業の官職は大膳大夫（だいぜんのたいぶ）である。この職は宮中の宴会部長のようなものであるが飽く迄も肩書であり位階は従四位下で一流官庁の次官級になる。後白河法皇の側近なのである。検非違使の安陪資成から言われた平信業は顔色を変えて驚いた。早速に法皇に報告すると、法皇は思わず「あつ」と声をあげられた。そして「これらのことは内密に図ったことなのに洩れてしまったのか…と困つた」様子で、「それにしても、どうしてこうなつたのか…」と嘆かれるばかりで、清盛に対する（使者として来た資成に対する）明白な返答をされなかった。

安陪資成は平家屋敷に駆け戻つて此の様子を報告したから、清盛は「それこそ密告して来た仲綱の話は真（まこと）のことである証拠になる。もし仲綱が知らせて来なければ浄海（清盛）が安穩では居られなかつた（危ういところであつた…）と言つて重臣の藤原飛騨守景家及び筑後守貞能（侍大将・忠清の子ら）に謀反人一味と分別された者たちを捕らえるように命じた。是に依つて平家の軍勢が二百騎三百騎と都の中を駆け巡り、此処彼処と押し寄せては陰謀に加担した（…と、仲綱が密告した）人々を捕縛したのである。

なお、本文からは少し離れるが、此の章段にあること―平清盛が「反平家謀議の密告」を聞いて、それに依り状況を一気に逆転させたこと―は後白河法皇との対立と比叡山僧兵軍団との合戦により不利となつた平清盛が「反平家グループの存在を知つて起

死回生の強硬手段を打つた策謀」とする意見もある。無責任な言い方をすれば策謀でも乱暴でも「平家物語」は此処から面白くなつてくるのであるから、登場人物は遠慮せずに派手に行動して貰いたいものである。続いて登場する謀反人たちはそれに応えるように？逃げまくつた挙句に首が無くなつたりする。人生一寸先は闇…。

さて後白河法皇を牽制した平清盛入道は、次に中御門烏丸に屋敷を構える新大納言藤原成親を逮捕することにした。この人物は、巻第一「鹿谷」で平家物語作者に脱線公家ぶりを披露して貰つた男で、その妹は何と平家頭領・平重盛の奥方なのである。序に触れておくと、重盛の死後、そして平家都落ちの後、未亡人は重盛の遺骨を護り筑後守貞能を従えて常陸国に来た。筑波山麓多氣に居た大掾氏を頼つたのである。そして水戸郊外に重盛を葬り一寺を建立して菩提を弔つた。その寺院は現存している。妹は立派でも兄は軽率だった。

それでも一応は身内になる人物であるから清盛も慎重に、先ず使い走りの者を成親の屋敷に行かせて「相談したいことが有るので成親卿には平家屋敷へお立ち寄り下さるよう」と申し入れた。謀反計画が漏れたことを知らない成親は、まさか自分に逮捕状が出て居るとは夢にも思はず「…多分、是は後白河法皇が延暦寺の明雲座主を捕らえようとなさるのを、思い留まつて頂くように頼んでくれ!」と言う話であろう…既に法皇はお怒りであるから、今さら嘆願をしても無駄なことなのに…と優越感に浸りながら、特に急ぐとも言われていないけれども早速に涼しげな衣服に着替え、自家用車も綺麗に磨かせて飾りを付け運転手（牛飼）や従う家臣たちにも服装を正すように命じ供の武士数人を従えて屋敷を出た。

考えれば是が「最後の門出」になる訳であるが、それは後になってからようやく気が付くことである。

藤原成親の屋敷は中御門大路と烏丸小路の交差する辺りに在ったと言われる。当時の京都御所の東方である。清盛の居場所は全く反対の方向であるから、成親は悠然として牛車の中にふんぞり返ってやつて来た。清盛の居る西八条邸が近くなる頃、辺りの道には四、五百メートルに亘って軍勢が詰めていて成親の前途を待ち受け取り囲むようにして門の辺りに誘導した。「何事であろうか？」と少し不安になってきたが、思慮の浅い人物なので陰謀が漏れたとは未だ気付かない。自分が大事な客であるから出迎えるも多いと思っている。

門前で牛車を下りて門の中へ入ると、そこにも恐ろしい顔をした武士が詰めて居て一斉に成親を取り囲んだ。その連中は成親の手を捉えて、いきなり押し倒すようにしながら「縄で縛りあげましょうか？」と言った。見ると近くの座敷に清盛が居て簾すだれの向こうから覗んでいる。「ま、其処までしなくても良いであろう。」清盛がどうでも良いような口調で言ったので武士たちは成親の回りを囲み強引に廊下の上に引き摺り上げた。

この状況を見た成親の家臣、下僕、牛飼(運転手)などは恐怖に震え上がり、四足駆動の新型二輪式高級車を放置したまま一目散に逃げ出してしまった。成親は清盛屋敷の狭い部屋に放り込まれ、悪夢を見ているような心地で何が何だか分からない俛に呆然としているほかは無かった。勿論、周りに監視の武士が居た。源平盛衰記では成親が監禁されたのは格子を嵌めた部屋、としてあるが、そういう部屋が常備されていたのであろうか…。

藤原成親の逮捕と時を同じくして「鹿ヶ谷の謀議」

に参画した、と多田行綱が密告した人物が次々と平家の軍勢に捕らえられた。近江中将入道蓮淨こと村上源氏の成正、法勝寺就行俊寛僧都、山城守中原基兼、式部大輔正綱、平康頼、平資行、惟宗信房らである。平康頼らは清盛系の平氏では無い。(鹿谷の「源成雅」「式部大夫章綱」「平佐行」は誤記につきお詫びして訂正します。捕まった上に名前を間違え気には思いますが…) 鹿谷謀議に加わったメンバーが一斉に検挙されたニュースは朝一番に知れ渡ったから、首謀者とも言うべき西光法師は当然ながら自分の身にも危険が迫ることを察知して、後白河法皇の許に駆け付けようとした。普段なら偉そうに牛車に乗って行くのだが緊急事態であるから牛を馬に乗り換えて単身で向かった。しかし、その途中の道は既に平家方の武士に抑えられて居て(平清盛公が)お呼びであるから西八条の館へ来い!」と言われた。

苦し紛れでは無いが無駄な抵抗で「これから後白河法皇に申し上げることが有って法住寺殿(賀茂川の東岸、七条に在ったとされる)へ参内するので、その後で行く。」と言えば、平家の武士たちは「可愛げの無い入道だな!今になって法皇に何を申し上げると言うのだ!そうはさせぬ!」と親切にも馬から引きずり下ろしてくれた。その上に手足を縛りあげ、数人が西光をぶら下げるようにして西八条邸まで連行して行った。乗って来た馬の消息は記録されていないが、多分、平家の厩に繋がれたと思う。西光は反平家運動の中心人物と見なされていたから、平家の家来たちも丁寧に縛り直して清盛の居る座敷の中庭に引き据えた。

それを見下すようにして庇(ひさし)の廊下に立った清盛は「この入道を滅ぼそうとする奴のなれの果てか!そやつを此の場に引き寄せよ!」と言って、

自分では下駄を履き、庭に降りてきて地面に抑え込まれている西光の頭部を踏み付けた。そう言う場合には顔を伏せて置けば良いものを気の強い西光は顔を上げて清盛を睨み返そうとするから自動的に下駄で顔を直に踏み付けられることになる。原文には「むずむずとぞ踏まれける」と書いてあるが、痒(かゆ)かった訳では無く力任せに踏まれたのであり痛かった筈である。

清盛は怒りのあまり下駄の履き心地を試すように西光の顔を踏みながら叫んだ。「己(おのれ)らのような下臈(げろう)の果て(身分の卑しい者)を法皇が家臣となされて、父子共に考えられないような地位や官職を与えられた。それに慢心して身分不相応の振る舞いが有ると私は見ていたが果たして罪の無い天台の座主(明雲大僧正)を流罪にするような天下の一大事を引き起こした。その上に此の平家一門を滅ぼそうとする謀反に加担したのか、何もかも正直に白状せよ!」

時代劇の場合は下駄で顔を踏まれる場面も無いが縄で縛られた上に謀反計画が全て露見している被疑者は黙止するか、関与を否定するかである。しかし西光は余程、気の強い人物であつたらしく顔色も変えず悪びれた様子も見せずに居直った。原文は「悪びれた気色も無し、居直り、嘲笑(あざわらって…)と書いてあるから、清盛も被告の発言中は下駄で顔を踏むのを止めたらしい。少し顎が痛むけれども西光は歯切れの良い言葉で清盛に反論したのである。その態度には逆に平清盛を見下すような様子も感じられた。

「貴方は此の西光をとにかく言われたが、そのようなことは有りませんよ。それどころか、貴方のほうこそ自分の身に過分なことを言っている…。他人

はどうか知らないが、此の西光が聞くところでは、偉そうなことは言えない筈です。何よりも私は院（後白河法皇）に召し使われている身ですから、院の執事（重職）である藤原成親卿が関わられた院宣（法皇が出す命令書）に反対をする事は出来ません。それは同意をしました。然しながら、貴方が私に聞き捨てならないことを言った―私が過分な振舞いをした！と言ったのは其のまま貴方に返す言葉である―貴方は故・刑部卿（ぎょうぶぎょうぶきょう）平忠盛の子ではあるが、十四、五歳になるまでは任官もせず、いた。つまり大臣の子か何か知らないが普通の公家の者が宮中に出仕奉公する時期に、高下駄を履いて都の中をウロウロするような無頼の暮しをしていた。

その頃、今は亡くなられた中御門藤中納言家成卿の屋敷に出入りをしていて、京都中の人々からは高平太（たかへいだ）などと呼ばれていたではないか。（中御門藤中納言家成は今回、清盛が逮捕した藤原成親の父に当たる。成親の逮捕を暗に恩知らず、と言っている）そうした中で、保延の頃（一一三〇年代の後半、崇徳天皇時代）に海賊退治の命令を受け、海賊の張本人三十余人を捕らえて来た功績で四位の位を貰って兵衛佐（ひょうえのすけ）になったのさえ、過分と世間で噂した。

その上に、かつて殿上の交わりを公家たちに嫌われた者の子が太政大臣にまで成りあがったことこそ過分ではないか？…是までに侍（武士階層）が四位に叙されたり、諸国の国司に任命されたり検非違使に任命されたりしたことは有っても太政大臣にまで昇った例は無い。これこそが過分というべきであって、私のことを言える立場では無かるう：」と、長いセリフを一言も間違えずに堂々と言い放った。ただし、清盛の代弁をする訳では無いが、裏面の事情を説明して置くと、海賊退治を指揮したのは清盛の父・忠

盛であるが忠盛は功績を息子の清盛に譲ったのであり、その理由は清盛が白河上皇の子であることによる。また、青年時代に清盛が高下駄を履こうが長靴を履こうが、その程度の自由は当時も有ったと思われる。西光は苦し紛れに要らざる事を言って墓穴を掘った。

最後まで言いたいことを言わせていた清盛は遂に我慢の限界に達して暫くは怒りで言葉が出ない状態であったが、やがて「此の男の首は簡単には斬るな！十分に詮議して戒めよ」と厳しく言い渡して席を立った。忠実な家臣だと「処刑するな！」と誤解するような命令であるが、清盛は苦しめるだけ苦しめてから処刑しろ！と、恐ろしい命令を發したのである。

西光法師は松浦太郎重俊という拷問処刑専門の武士に引き渡され、手や足を強く挟むなどプロに依る効果的な拷問を受けた。さすがに専門家だけあって、自白に至るまでの責めは厳しく残酷であり、西光は意識朦朧（いしきもうろう）とした状態でした。有ること無いこと全てが自白調書四、五枚に記録されてしまった。

その後は自白して不要になった口を裂かれた後に都の中心部へ連行された。其処が刑場になるので処刑する場所は辺鄙な所であるべきだが是は見せしめの為に繁華街で公開されたのである。現代だと警察で白状した後は検察庁で検事に調べられ、それから起訴されて裁判にかけられるようであるから悪人が反省する迄に時間がかかるけれども、昔は合理的で一番偉い人が次の五項目を選べば後は自動的に刑罰が執行された。時には冤罪（えんざい）も有ったらしいが、無実だと分かれば釈放も早かった。しかし刑罰の執行も早かったから無実の証明が忙しい欠点があったらう。

・無罪放免（牢内で虐待されただけ損）

・答（むち）で十回から百回打つ。回数が多いと死ぬことも有ったらしい。打つ場所は背中と尻で自分が選べた。（選びたくは無いが…）

・杖で六十回から百回打つ。これは何処を打たれても死亡率が高い。

・流罪、流される場所は罪状に依って「近（こ）」
「中」
「遠流（おんる）」であり、安房、常陸、土佐などの国々が充てられていた。源頼朝が流された伊豆国も入っている。

・流罪より重いのだが余り適用されなかったと思われる刑罰に「徒刑（とけい）」がある。これは終戦時の日本軍に対して現在の某大国が課した「強制労働」で非人道的行為の見本である。

・「死罪」、これは、どちらにしても助からないのだが「絞首（きょうしゅ）刑」と「斬刑（ざんけい）刑」である。後代の「磔（はりつけ）」は見せしめの意味があつたらしい。

話が逸れたけれども、西光法師が拷問されて自白調書を取られた後に意識不明のまま連行されたのは五条大路と朱雀大路の交差点である。磔のように大勢の人が居る場所で見せしめに首を斬られたのであるが既に死んでいたようなものである。

加賀の国で事件を起こした（比叡山などの怒りを買った）西光の二人の息子も既に捕らえられており、嫡男の前加賀守近藤師高は流されて居た尾張国の井戸田（現在の岐阜羽島付近とされる）で在地役人の小胡麻郡司維季（む）まのぐんじと云う者に斬られた。そして次男の近藤判官師経は都で牢に入れられていた

のを牢から出されて六条河原で斬られた。父親が五条で息子が六条、近くで良かった！などと言っていない。今まで顔を出さなかったと思われるが、この兄弟の下に左衛門尉師平という弟が居たらしく家臣三名と共に首を斬られている。

西光法師に対する平清盛の憎しみが如何に深かったかを知らされる記事であるが、平家物語の作者は、この章段の最後に「…これら（のこと）は、言う甲斐無き物の秀（ひいで）て、いろふまじき事にいろひ、過たぬ天台座主流罪に申し行い、果報や尽きにけん、山王大師の神罰、冥罰を立ちどころにかうぶつて、かかる目にあへりけり」と説明している。つまり「自業自得？」だと…。

西光法師は自分が予想外の出世をしたことから格別な事情が有って出世した平清盛も自分と同じように好運だけで頂天に昇ったものと思ひ込み、それに対抗するつもりで後白河法皇の權威を楯にして平家を追い落とそうと企み、あれこれと策を巡らし罪の無い天台座主を流罪にするなどの悪事を重ねたけれども、持っている果報が尽きて比叡山山王権現の罰をうけることとなり遂に捕らえられて拷問を受けた上に命を落とすことになった。後白河法皇の意図があったにしても西光の力では平家に対抗出来なかったのである。

(続く)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館 2014年 CONCERT SERIES

第6回「里山と風の声」コンサート

11月9日 日曜日 開場 14:30 開演 15:00

里山に風が流れるとき 言葉がうまれ 詩がうまれる
耳を澄ませば 里山に風が弦の木霊をかえしてくれる

ことば座の言葉人白井啓治が若き北海のギタリスト亀岡三典と里山に声を紡ぐ

朗 読:里山の言葉人・白井啓治

寒蝉 もう言葉は… 断言 ことば 苦悩する希望 風がためらって
希望の声

ギター:北海の貴公子・亀岡三典

大序曲 (ジュリアーノ) 11月のある日 (ブローウェル) アストゥリアス (アルベニス)
セビリア風幻想曲 (トゥリーナ) 黒いデカメロン (ブローウェル)

コンサート料金 4000円(事前購入 3500円)小・中学生 2500円

ギター文化館 0299-46-2457 Fax0299-46-2628

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35 HP: guitar-bunkakan.com